

厚原の

二本樋じよ

平成十二年五月五日号

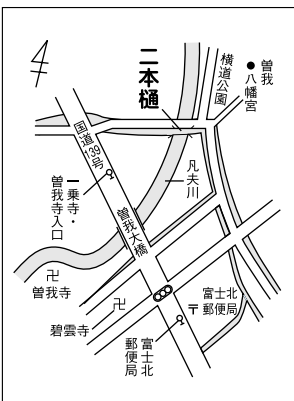
潤井川から取水した鷹岡吉原用水路（通称鷹岡・伝法用水路）が凡夫川ぼんぶの上を渡るようにつけられているといを二本樋と呼んでいます。今回は、厚原にある二本樋にまつわる話を紹介します。

昔から水田に水が欲しいという人々の願いは強く、新しい用水路をつくる努力が村々で続けられました。

富士山のすそにある厚原や伝法付近も、日照りの害が多く、水が不足して困っていま

した。今から八百年ほど前、山梨県から移り住んだ植松ひょうこうのすけのぶ兵庫助信継という人は、潤井川から水を引くことを考えました。そして、幅二メートルから五メートル、長さ六キロメートルの鷹岡・伝法用水路をつくったのです。用水路の途中には、凡夫川という深い沢がありました。長さ五十メートルもある木でつくったかけどい二本で用水を渡すことに成功しました。一本（南側）は厚原へ、もう一本（北側）は伝法へ送水するためのもので、これが二本樋です。

それからというもので、この用水路に沿って厚原、伝法などの村々は発展していったのです。そして、植松家は用水路とどの管理に当



たる樋代官^上を代々受け継いでいきました。

樋代官植松氏の子孫

植松哲男さん（厚原）

植松家では、明治時代まで用水路や二本樋などを維持管理してきました。二本樋は昔は木でつくられていて、厚原北部にあった大きな松林の木を利用したと伝えられています。また、用水路の水は飲料水やかんがい用水として使用されていたため、二本のといの水量の多い少ないでよく争いがあったようです。二本樋は、地域住民にとって生命の源とも言える重要な施設であったのだと思います。

私が子どものころは、用水路の水はとてもきれいで、生活用水としても利用されていました。ウナギやズガニ、蛍もたくさんいましたし、よく泳いで遊んだものです。用水路の周りはいつものにぎやかでしたね。今はコンク



▲ 二本樋

リートで囲まれ、水も汚れてしまいました。ぜひ早く下水道を整備していただき、昔のよう楽しめる清流に戻してほしいですね。